

大阪大学のグローバル医療への取組み



夢はバラ色

史 賢 林*

Challenge of Osaka University for Medical Globalization

Key Words : Medical Globalization, Global Health, Osaka University

“国際” から “グローバル” へ

近年、交通網や情報通信技術の飛躍的な発達により人、モノ、情報が大量に、かつ短時間に国境を越える時代となりました。また、EUやASEAN等の複数の国家からなる経済共同体や、わが国も参画するTPP等の国家間の経済的な結びつきもいっそう強くなっています。しかしその一方で、難民問題やテロ対策問題、さらに地球環境問題など、従来の“国際”、つまり国と国の際（きわ）だけではとらえきれない、地球規模での対応を迫られる問題も多数生じており、地球規模で思考して問題解決を計る“グローバル”という概念の重要性がますます高まっています。

日本の果たすべき“グローバル医療”貢献

わが国は豊かな経済力や優れた科学技術力に裏付けられた高い医療水準を誇り、国民の誰もがいつでも比較的 low cost で医療機関を受診できる国民皆保険制度も定着していますが、世界には医療水準が不十分だったり、医療機関へのアクセスが制限されていたり、さらには高額な医療費のために医療を受けにくい国も多数存在します。

国民皆保険制度をはじめとするわが国の保健医療システムは世界的に高く評価されており、同様の公的医療保険制度の導入を試みようとしている国も散

見されます。さらに近年、アジアやアフリカの開発途上国でも経済成長にともなって先進諸国と同様に生活習慣病等の慢性疾患が課題となっており、世界に先駆けて高齢社会を迎えたわが国が克服してきた、あるいは克服しようとしている問題を、地球規模で思考して解決を図る必要性が生じています。

もちろん、すでに人口減少時代に突入したわが国にとって、優れた医療技術や保健医療システムをグローバルに展開することは国益にもかなうはずで

阪大病院国際医療センターの開設

阪大病院では2013年4月に、外国人患者の診療に関連する様々な業務やコーディネートを一貫して行う部署として、国際医療センターを開設しました。その背景には2000年代後半ごろから外国人患者、とくに先進医療による治療を目的として海外から直接受診に訪れる患者が徐々に増加し、言葉の問題や宗教、文化の違いが原因で、院内の各部署で様々なトラブルや苦勞がありました。

そしてせつかくの苦勞も、病院全体として知識やノウハウが蓄積されることなく、別の外国人患者が来れば別の部署でまた同じような苦勞が繰り返されるといった具合で、そのため外国人患者の診療を一括してマネジメントする部署が院内に必要だという声が次第に高まりました。これを受けて、前センター長の澤芳樹先生（現 医学系研究科長）と現在のスタッフが中心になり、院内の各部署とも連携、協力して本センターが開設されました。

さらに開設後は、国際医療センター運営委員会を定期的に開催し、阪大病院だけでなく学内の様々な部局や研究科から集まった運営委員による議論を重ねながら、よりよい組織体制や活動内容となるよう鋭意工夫を重ねています。



* Kenrin SHI

1968年2月生

大阪大学大学院医学系研究科（2001年）

現在、大阪大学医学部附属病院

未来医療開発部 国際医療センター

特任講師 医学博士 整形外科

TEL : 06-6210-8302

FAX : 06-6210-8303

E-mail : info@cgh.med.osaka-u.ac.jp

外国人患者の診療と診療体制の構築

図1に2014年度の外国人患者数を示しますが、出身国(国籍)は中国が最多であり、言語は英語と中国語がほぼ同数で、両言語で大半を占めました。安全、安心な医療を提供するには、医療者と患者の正確なコミュニケーションが必須ですが、本センターには中国人スタッフの他、英語やポルトガル語に堪能なスタッフも在籍していますので、これら3言語は院内で常時対応でき、他の言語についても随時医療通訳を手配できる体制をとっています(注:医療通訳は有料です)。

外国人診療にあたってはMedical Excellence Japan等の関係団体や、必要時には各国の大使館や領事館とも連携、協力することにより、阪大病院の誇る先進医療を国内外の外国人患者も安心して受けることができます。また、関西全体における外国人診療の円滑化や情報交換を図るために、りんくう総合医療センター等の関係医療機関と連携して診療ネットワークの形成にも取り組んでいます。同様の試みは、阪大病院に続いて附属病院内に国際的な業務を扱う部署を開設した東京大学や九州大学、北海道大学等と連携することにより全国レベルでも取り組んでいます。

さらに阪大病院では本年2月に、外国人患者受入れ医療機関認証制度(Japan Medical Services Accreditation for International Patients; JMIP)を受審し、近く正式に認証される予定です。本認証制度は、外国人患者の円滑な受入れを推進するため厚生労働省が平成23年度「外国人患者受入れ医療機関認証制度整備のための支援事業」として策定したも

のですが、全国で現在11の医療機関が認証を受けており、これまで大学病院では藤田保健衛生大学病院のみが認証されています。

外国人医療従事者の研修受入れ

本センターでは阪大病院における外国人医療従事者の研修や見学に関するコーディネート業務も行っています。近年、世界各国、なかでもアジアからの研修や見学の要望が増加しており、様々な診療科や部門と連絡をとって充実した研修、見学となるよう努めており、長期にわたる場合は研修者の心理的なサポートも行っています。2014年度における長期(2か月以上)研修者は2名の看護師を含む17名で、医師15名のうち6名は厚生労働省の臨床修練制度を利用した研修者でした。研修者の出身国も患者同様に中国が11名と最多でした。

また阪大病院は2015年4月、あらたに制定された臨床教授等を行う病院として厚生労働省から指定を受けました。この制度は、臨床あるいは研究の経験が豊富な外国人医師による診療行為を認めるもので、指定を受けたのは九州大学病院に次いで全国で2番目です。近く高度救命センターに外国人医師を受入れ、臨床指導にあたらせる予定です。

先端医療のアウトバウンド展開

本センターでは、阪大病院医師による医療のアウトバウンド展開のサポートも数多く行っています。これらは、わが国ないし阪大病院で開発された先端的な医療機器や医療技術を、主にアジアの開発途上国において展開するものですが、阪大病院医師が医療行為を実施するだけでなく、支援国の医学や医療技術向上のため現地医師らに対して実習や講義も積極的に行っています。

代表的なものでは、国際循環器学(旧 先進心血管治療学)による冠動脈慢性完全閉塞病変に対する側副血行路を介した経皮的冠動脈インターベンションや、器官制御外科学(整形外科)による3Dシミュレーションにもとづくカスタムガイドやプレートをを用いた変形矯正手術を行っています。また放射線核医学では、国際原子力機関からの委託を受けて、PETサイクロロン施設整備の技術的サポートと運用にあたっての教育や研修を実施しています(図2)。

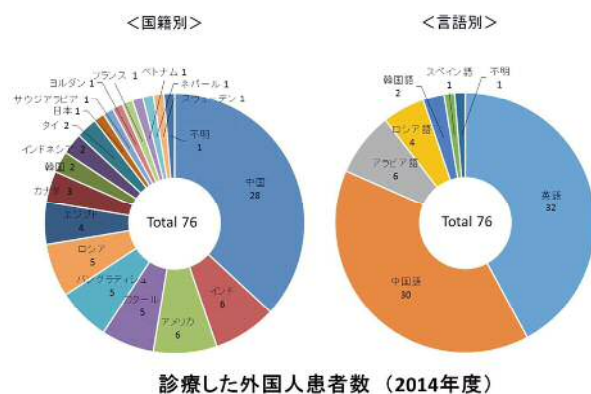


図1: 2014年度の外国人患者数(左:国籍別, 右:言語別). 国籍別では中国が最多であり、言語別では中国語と英語で大半を占めた。



図2：ミャンマー ヤンゴン総合病院におけるPETサイクロトロン施設建設の立会い（2014年12月撮影。その後、施設は完成し、現在は運用にあたっての研修を実施中）。

“グローバル医療”教育・研究・人材育成

国際医療センターは英語名称を「Center for Global Health」として、阪大病院における医療のグローバル化を目指しています。本センター開設後、2014年7月にはグローバル思考にもとづく診療と研究、教育を進める「国際・未来医療学講座」が医学系研究科に開講されました（文部科学省 未来医療研究人材養成拠点形成事業 大阪大学「国際・未来医療のための人材養成拠点創生」）。さらに昨年10月には病院だけでなく、医学系研究科の国際関連の組織が一体となり、グローバルな診療、教育、研究を推進すべく「グローバルヘルス・イニシアチブ」も発足しました。

このような“グローバル医療”は、医師や看護師、薬剤師等の従来の医療従事者のみでは困難であり、新たな人材の育成が必要です。国際・未来医療学講座では全学共通教育科目として、大阪大学の全学部生を対象に「健康・医療イノベーション学」の全学教育を行っており、200名超の受講生を数えるマンモス講義になっています。また、少人数の大学院生を対象としてさらに一歩進んだ教育プログラムも実施しており、修了後の新たなキャリアパス形成につながることを目指しています。さらに文部科学省スーパーグローバルハイスクールとの連携による教育プログラムも実施しています。

一方、外国人患者の診療では、日本人患者以上に詳細な説明や正確なコミュニケーションが必要ですが、わが国において医療通訳者は質、量ともに不足しており、育成システムや認証制度もまったく確立

されていない状況です。本センターならびに国際・未来医療学講座では昨年4月から、大阪大学中之島センターにおいて社会人を対象とした「医療通訳養成コース」を開講し、高度な語学力に加えて正しい医学的知識や医療倫理を持ち、さらに外国人患者の文化宗教的背景までも十分理解した医療通訳者の育成を行っています。さらに、他の大学や各種団体とも連携して、認証制度の確立も目指しています。

上記の各種教育プログラムを通じて学内外でのニーズや評価、存在意義は飛躍的に高まりつつありますが、学外ないし社会に向けた情報発信のために国際医療シンポジウムを各年度2,3回開催し、毎回100～200名の参加者を集めています（図3）。また、これらシンポジウムの一部は大阪大学の海外拠点を活用して海外でも実施しており、日本の医療や医学教育の優位性を海外に向けても発信しています。なお、一連の教育、研究、人材育成活動は、本センターならびに国際・未来医療学のウェブサイト随時更新し、常に最新の情報を提供していますので、ぜひご訪問ください（国際医療センターウェブサイト <http://www.cgh.med.osaka-u.ac.jp/index.html>；国際・未来医療学ウェブサイト <http://www2.med.osaka-u.ac.jp/cgh/think/>）。



図3：昨年12月11日に東京で実施した第7回国際医療シンポジウム（北海道大学、東京大学、九州大学と共同で開催し、161名が参加。後方左から2人目、マイクを持って発言しているのが筆者）。

“グローバル医療”学術ネットワーク形成

わが国の優れた医療技術や保健医療システムを、わが国自身の医学や医療の進歩とも調和させながらグローバルに展開していくにあたって、学術的な視点からの考量や検証は欠かせません。すなわち、グ

ローバル社会におけるわが国の医療貢献を研究、教育する新たな学術領域、“グローバル医療”学の誕生が望まれているわけです。

本センターは、すでに学内の様々な部局や研究科との連携による教育体制やりんくう総合医療センター等との連携による関西圏での診療ネットワークの形成はもちろん、北海道大学、東京大学、慶応大学、国立国際医療研究センター、名古屋外国語大学、九州大学等との連携により全国規模の学術ネットワークを形成しつつあります。さらに文部科学省、厚生労働省、経済産業省等の中央省庁や、Medical Excellence Japan 等企業や団体との強固な協力関係も築きつつあり、本年中に「日本グローバル医療学会」として新たな学会を設立する予定です。

おわりに

以上、述べてきましたように医学、医療における新たな潮流や新学術領域としての“グローバル医療”を、全国規模で展開すべき時代がまさに到来しているわけですが、これは決して一過性のものであってはなりませんし、もちろん利益のみを追求するものであってなりません。さらに言えば今後、わが国の医学や医療技術の他国に対する優位性がいつまで保たれるかわかりませんし、為替相場の変動によっ

てはわが国の医療費や医療機器が外国人にとって必ずしも低廉とは限りません。

つまり、様々な外部要因の変化によらず世界の医療に持続的に貢献していくためには、わが国の医療ならではの価値を創造し世界に向けて発信していく必要があるわけです。訪日外国人客から見たわが国の宿泊施設の魅力として、しばしば“おもてなし”、すなわち hospitality が挙げられますが、医学や医療においてもわが国らしい hospitality を確立し、磨いていくべきでしょう。そして hospitality に加えて、医療従事者が目の前の患者を救うために全身全霊を注ぐ態度や誠意、すなわち honesty もわが国の医療の魅力として発信していくべきでしょう。

医療従事者が十分な hospitality や honesty を身につけるためには、ただ学問的な教育や技術的な研修を行うだけではなく、高度なリベラルアーツ教育を含む全人的な教育がぜひとも必要になります。また教える側、学ぶ側ともに各個人として十分な人生経験を積みながら正しい道徳観や倫理観、さらには死生観をも身につけていくことも求められるでしょう。大阪大学では今後も、文系、理系を問わず学内の様々なリソースを動員して、“グローバル医療”の教育と研究、人材育成に鋭意取り組んでいきたいと思えます。

